

5

CREATIVE

学 年 だ よ り

第 8 号 令和 2 年 5 月 13 日

県立村上中等教育学校 (15期生)

●今、じっくり。工夫をして。

Keep Distance

しばらく各自の質問をもとにした分散登校での学習となります。

ここで、あらためて学習法について考えてみましょう。

○学習の原則は単純です。「わからないこと」を「わかるようにする」。「できないこと」を「できるようにする」。これだけ！

← ということは、「わからないこと」「できないこと」を、かなり意識的に把握することが必要です。

← 教科書などの文字を目で追うだけでは意識が働いていないため不十分。意識的に自分で考え、挑戦することが前提です。

○「わからない」のは「わかりつつある」からです。

← むしろ、ものごとをわかっている場合は、「わからないことをわかっている」ことが多いように思います。

← 家庭学習などで質問が出てくるのは前進の証です！

○「よい質問をつくる」のは案外面倒なこと。池上さんも「いい質問ですね」とそう頻繁にはおっしゃっていません。

← (これは私の個人的な考えですが) 理解度に幅があるように、質問にも幅があります。

← 最初から質の高い質問はつくりにくい。ある程度、量をこなし、理解度が深まれば、質問も質が高まると思います。

○されど、(ここがまた興味深いものなのですが) 知識があまり多くないがゆえに、その「本質を問いたですよい質問」を生み出すこともよくあります。みなさんは下の質問にどう答えますか。

英語のDは、大文字だと、左が縦棒で、右が丸いのに、なぜ小文字(d)だと左が丸く、右が縦棒なのですか。

← これは私が以前、中学1年生から受けた質問です。これに答えるには「英語史」と呼ばれる学問領域の知識が必要です。

○特に休校中の家庭学習を充実させるためには、(1) 家庭で、まず自分で取り組み、わかる部分とわからない部分を明確にする (2) 質問カードにまとめる (3) 学校で解決する といったサイクルがとても大切です。

← まずはどんどん質問を生み出すことを心がけましょう！

← そして、それを一つずつ潰していくことが、学習の礎であることに他なりません。

(水戸)

ポイント

△ 関係代名詞がわかりません

意識的に自分で取り組んでいる

わかる所とわからない所が
はっきりさせてある

○ 解説のここまで読んで、理解できたのですが、

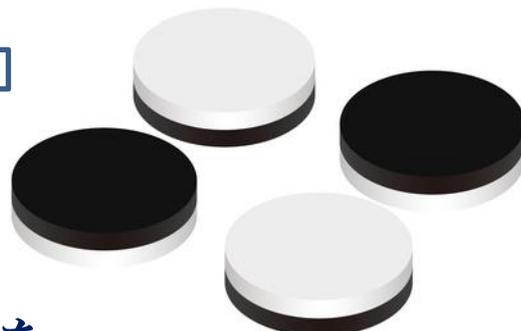
なんで次からこうなるのかがわかりません。

○ この例から判断してみて、

意識が働いている

前置詞と名詞は副詞と考えてしまってよいでしょうか。

提案型も立派な質問！



質問力は問題解決力。

まずはどんどん「質問カード」に記入を。

次第によい質問が作れるようになる！

自

宅にいる時間が増え、倉庫の中を整理した。まあ、出てくるわ出てくるわ、小学校の教科書やら、図工の作品、給食費納入袋なんていうものまで。それに、高校の教科書やノート、それに某通信添削の赤ペン先生などなど。高校時代、当時はなんだかテンション低かったなあ・・・。

中学生の時は陸上でそれなりに地元では知られていた。でも高校に入ったとたん、似たようなライバル出現で撃沈。自分の存在価値を完全に見失ってしまった。勉強？ 当時、僕の高校では、例えば数学の授業は、先生が黒板を使って説明し、生徒がそれを写すというスタイルだった。物理の授業ではひたすら問題集の問題を解き、先生は最後の5分だけ説明をする。隣のクラスでは、予備校講師を彷彿とさせる別の先生が、熱意溢れる授業をしているのに、なんでうちのクラスの先生は、教室をぐるぐる回っているだけなのだ！とひがんだものである。生物の授業に至っては、先生は何も説明しなかった。

そういえば中学生の時も、僕に英語を教えてくださいましたのは、実技科目の先生だった。関係代名詞の説明では、「人を説明するときは who を使うのだぞ」と教え、また次の時間には、「人を説明するときは whose を使うのだぞ」と説明をし、またその次の時間に、今後は「人を説明するときは whom を使うのだぞ」といった説明だった。

ところで、先ほど紹介した物理の授業は僕が高校2年の時の1学期の様子だ。だけど1年すごしてみても、先生のスタイルに変化はなかったが、僕はいつのまにか物理を楽しみと思えるようになっていた。なぜなら、「なんでこんな公式ができたのか？」とか「なんでこの問題はこう解くのか？」などということを考えながら、自分で「公式ノート」や「解説集」を作ることになっていたからだ。家庭学習では公式を導きだすのに数時間もかかったこともあるし、1問を解くのに半日かかったこともざらにある。ともあれ、僕は考える楽しさを見出していた。当然、この学習法を数学にも応用し、「公式ノート」もつくった。また、生物についても先生は説明されなかったが、一方、僕は「ホメオスタシス」については数十年たつたいまでも説明ができるほど理解を深めていた。実はその先生は教科書を40等分し、生徒ひとりひとりに単元を割り当て、プリントを作らせ、生徒に授業をさせていたのだ。僕はたまたま「浸透圧とホメオスタシス」担当だったというわけ。なんとテストも自分で問題をつくり、解答するシステムだった。

一方、中学校で英語を教えてくださいました先生は、説明を短時間で終えて、そのかわりに音声を頻繁に流してくれていた。するとある時、そのネイティブが発する I'm from Kobe. という一文の音声に僕が衝撃を受ける。なんと色気のある声なのか。その声を、僕自身が作り出したいくなって、先生からテープをかり、ひたすら練習をした。声が枯れてしまったが、いつのまにか教科書1冊を丸ごと暗唱してしまっていた。

セレンディピティ (serendipity) —— とうとうこれまで日本語になってしまったのかと思わずにはいられないが (ことばを覚えてほしいのであえて意味を書きません。調べてみてください)、人生はまさにセレンディピティに満ちている。



今の価値観なんてすぐにかわってしまう使命にある。実際、僕が高校時代、価値をあまり見出せていなかった物理と生物の授業は、今でいうアクティブラーニングの立派な実践例に他ならない。また、中学校の英語の授業は、今となっては、中学生相手と考えれば、その説明には納得できるし、何より先生が音声をふんだんに取り入れてくださったおかげで、「あこがれの声」と出会い、これが生涯の行方を決める動機となった。

君たちには、今後、出会うであろうセレンディピティのためにも、時間的に少しだけゆとりがある今、そして再開後の学校生活において、しっかり時間とエネルギーを自分自身に投資し、かつ、様々なことに挑戦し、その場面を生かしてほしいと、改めて思う。 (水戸)

セレンディピティ